

適期に適量の追肥と赤かび病防除を確実に実施！

令和4年3月31日
新潟農業普及指導センター

- ◎播種時期の早晩による生育差が大きいですが、越冬状態およびその後の生育は順調である。
- ◎生育量により止葉抽出期に追肥を実施。小麦は穂揃期追肥も実施する。
- ◎赤かび病防除は、開花期とその7～10日後の2回を確実に実施する。

1 生育状況

- ・ 根雪期間は新潟市秋葉区で47日、北区で23日と昨年並にやや長かった。越冬状態は良好でその後の生育も順調である。
- ・ 大麦の茎立期は播種時期の早い秋葉区で3月22日と、平年に比べ、5日程度早かったが、播種時期が10月下旬の北区では3月31日頃になるとみられる。
- ・ 3月23～25日調査では、播種時期による差が大きく、秋葉区は平年に比べ生育量が大きく、生育の進みも早い。北区は、平年に比べ草丈は短く、茎数、葉数は並、葉色がやや濃くなっている。
- ・ 大麦は、平年の積算気温等から予測すると、止葉抽出期は秋葉区で4月5日頃、北区で4月14日頃、出穂期は秋葉区で4月20日頃、北区で4月28日頃と見込まれる。
- ・ 小麦の茎立期は4月第1半旬になるとみられ、出穂期は5月第1半旬と見込まれる。
- ・ 赤かび病防除は開花期をめやすに時期を決定するので、ほ場ごとに出穂期及び開花期を確認する。

表1 麦の生育状況（調査日：3月23日～25日）

区分	調査地点	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (L)	葉色 (SPAD値)	茎立期
大麦	秋葉区	31	1,178	11.7	47.9	3/22
	北区	11	808	8.7	47.9	3/31
小麦	秋葉区	21	971	10.2	41.1	3/31
	北区	15	893	9.5	38.3	4月第1半旬

2 当面の栽培管理

(1) 茎立期追肥

- ・ 10アール当たり標準施用量は、窒素成分で2kg。葉色が濃い場合（SPAD値で42以上）は1～2kgとする。

(2) 止葉抽出期追肥

- ・ 止葉抽出期は全茎の40～50%で止葉が抽出した時期で、この時期の追肥は稔実粒数の増加、粒重の増加に効果がある。
- ・ 大麦（はねうまもち）の施用量は窒素成分で10a当たり5kgを基本とし、生育状況に基づいて加減する（表2参照）。

- ・ ミノリムギは窒素成分で10a当たり1～2kgを基本とし、生育に基づき加減する。
- ・ 小麦（ゆきちから等）は、窒素成分で10a当たり2kgをめやすとする。

表2 止葉抽出期の生育と窒素施用量のめやす (kg/10a)

㎡当たり 莖数	葉色 (SPAD 値)	窒素施用量		留意点
		はねうまもち	ミノリムギ	
500本未満	45未満	5	2	○砂質土壌では葉色維持のため、左記+1kgとする ○過繁茂、葉色が濃い圃場では品質低下を招くため施用を控える
	45以上	4～5	1～2	
500本以上	45未満	4～5	1～2	
	45以上	3	1未満	

(3) 穂揃期追肥（小麦）

- ・ 製パン用強力粉の原料としての小麦については子実タンパク質含有率向上のために、穂揃期（出穂期の3日後頃）に必ず窒素を追肥する。
- ・ 標準施用量は窒素成分で4～6kg/10a（砂質土壌では6～8kg/10a）。

(4) 赤かび病防除

- ・ 薬剤防除を、大麦は開花期及びその7～10日後頃の2回、小麦は開花期及びその後7～10日間隔で1～2回（計2～3回）行う。

表3 赤かび病の防除のめやす…出穂期を基準にして時期を決める

区分	時期のめやす	参考
大麦	1回目：開花期（出穂期の4～7日後頃）	・ 出穂期とは、全莖の40～50%が出穂した日 ・ 出穂とは、穂の先端（芒を含まない）が葉鞘から現れた状態
	2回目：1回目の7～10日後頃	
小麦	1回目：開花期（出穂期の7～10日後頃）	
	2回目：1回目の7～10日後頃	
	（3回目：2回目の7～10日後頃）	

※ 農薬の使用にあたっては、登録内容を確認して適正に使用する。

※ 農薬ラベルに記載された、「適用作物」「使用量・濃度」「使用時期」「農薬成分の総使用回数」「使用方法」を必ず確認する。



赤かび病の病斑（大麦）

○ほ場巡回による発生確認

- ・ 出穂後はほ場を随時見回り、変色穂の抜き取りを実施する。
- ・ 変色穂が比較的多いほ場（赤かび病の発生、もしくは発生が疑われる場合）は、他ほ場と刈り分ける。

農産物検査法の検査規格では、赤かび粒の混入限度が0.0%と定められています。出穂期、開花期を確認し、適期防除により赤かび病の発生を抑えましょう！